



**Data**

監督：ローランド・エメリッヒ

出演：エド・スクライン/パトリック・ウィルソン/ルーク・エヴァンス/アーロン・エッカート/豊川悦司/浅野忠信/國村隼/ウディ・ハレルソン/デニス・クエイド/ジェイク・ウェバー/マーク・ロルストン/デヴィッド・ヒューレット/マンディ・ムーア/ダレン・クリス/キアーン・ジョンソン

## 👁️👁️ みどころ

日米開戦の端緒となったハワイ真珠湾攻撃は“不意打ち”だったから、大戦果を挙げても、どこかに後ろめたさが・・・？それに比べると、ミッドウェイ作戦は圧倒的に優位に立つ日本軍と、痛手からまだ立ち直れていない米軍との四つ相撲だから、山本五十六大將以下日本側は自信満々。ところが、結果は知っての通りだ。その理由は一体どこに？

エメリッヒ監督なら魚雷と急降下爆撃の大スペクタクルはお手の物。しかも、ドイツ人だから、勝負の分岐点を公平な目で！そんな期待の中、情報戦を含めた日米の戦う姿勢に注目！

ちなみに、私はこんな映画が大好きだが、一部ボロクソに評価している評論家もいるので、そんな少数説(?) もしっかりと！



## ■□なぜ戦後75年の今？登場人物は？■□

日米開戦の初戦（奇襲）となった1941年12月7日の真珠湾攻撃（パール・ハーバーの戦い）と、日米戦争の転機となった1942年6月4日のミッドウェイ海戦（ミッドウェーの戦い）は、映画の素材（ネタ）としては最高のもの。したがって、前者では『トラ・トラ・トラ！』（70年）や『パール・ハーバー』（01年）等の名作があり、後者では『ミッドウェイ』（76年）や『ハワイ・ミッドウェイ大海空戦 太平洋の嵐』（60年）等の名作がある。しかし、戦争映画の制作には金がかかるうえ、戦後75年間ずっと平和が続いてきた日本では、特に若者に戦争映画は受け入れられなくなっている。そんな中、タイトルも『ミッドウェイ』と明示した本作が公開。

マイケル・ベイ監督の『パール・ハーバー』は、ベン・アフレック扮する勇敢なパイロットが主人公で、恋愛ストーリーにも大きなウェイトが割かれていた（『シネマ1』10頁）

が、この主人公はもちろん歴史上の有名な人物ではない。NHKの大河ドラマとして最もよく使われる素材（ネタ）である「幕末モノ」、「明治維新モノ」では、坂本龍馬、西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作等の有名な人物がたくさん登場するが、本作の最初に出てくるアメリカ側の主人公は、『パール・ハーバー』と同じような、第6爆撃中隊長ディック・ベスト（エド・スクライン）をはじめとする若き兵士たちだ。もちろん、彼らは戦争の最前線で戦った兵士として戦争映画には不可欠の存在だが、日本人は全く知らない男ばかりだ。

他方、日米開戦に至るまでには、日米間にさまざまな駆け引きがあったことは歴史上の事実としてよく知られている。そして、そこに日本の山本五十六大将が大きく絡んでいたこともよく知られている。そこで、ローランド監督は、日米開戦前夜のドラマの中の日本側の重要人物として、米国駐在海軍武官だった山本五十六（豊川悦司）を登場させている。日米開戦に先立つ5年前の1937年に、この山本が親しく交流していたのが、駐日大使館付けの情報将校エドウィン・レイトン少佐（パトリック・ウィルソン）だが、そこで交わされた会話は？ちなみに、このレイトン少佐の名前を知っている日本人は相当の歴史通だ。

ミッドウェイの戦いは1942年6月4日（日本時間6月5日）の戦いとして有名だが、そこに至るまでには、日米間でのさまざまな人物が登場し、さまざまなドラマが展開されたのは当然。しかして、本作にも有名無名を問わずさまざまな人物が登場してくるので、それに注目！

## ■なぜドイツ人監督が？勝敗の分岐点を公平な目で？■

本作の監督は『インデペンデンス・デイ』（96年）等で有名なドイツ人監督のローランド・エメリッヒ。私は彼の作品が大好きで、『パトリオット』（00年）、『デイ・アフター・トゥモロー』（04年）（『シネマ4』84頁）、『紀元前1万年』（08年）（『シネマ19』169頁）、『もうひとりのシェイクスピア』（11年）（『シネマ30』83頁）、『ホワイトハウス・ダウン』（13年）（『シネマ31』160頁）、『インデペンデンス・デイ：リサージェンス』（16年）（『シネマ38』未掲載）等を観ている。ドイツ人の巨匠が、なぜ『ホワイトハウス・ダウン』のような映画を監督したのかも疑問だが、彼がミッドウェイ海戦を映画にしたのはそれ以上の大きな疑問だ。

パンフレットの「INTRODUCTION」には、「20年に及ぶリサーチと新たに発見された日本軍側の貴重な資料をもとに、両軍に敬意を捧げて史実を再現。」と書かれているが、それは一体なぜ？他方、パンフレットの「FILMMAKER INTERVIEWS AND PROFILES」によると、同監督は「ミッドウェイ海戦の話を今あらためて語りたかった理由の一つは、テクノロジーが進化したこと。もう一つは、ナショナリズムが台頭してきたこと」らしい。「そんな今だからこそ、アメリカの若者が民主主義のために戦ったんだということを、この映画を通じて思い出してもらいたいと思う」と語っている。また、「なぜ20年もミッドウェイに興味を持ち続けてきたのか」の質問に対しては、「この海戦について

の映画は過去にも作られたが、そのどれもあまりよくないからだ。それに、これは、歴史上、最も興味深い戦いの一つ。とても複雑で心を惹かれる」と語っているから、ビックリ。

本作の新聞紙評は多い。9月4日付朝日新聞で、編集委員・石飛徳樹は「勝敗の分岐点日米を公平な目で」の見出しで、「勝敗の分岐点となった海戦を公平誠実な視点で描いている」と書いているが、さて・・・。

## ■情報戦は？東京空襲の効果は？なぜMI作戦を？■

2020年の今、新たな局面、新たな次元に入ったかに見える“米中冷戦”では、超高度な情報戦が展開されているが、真珠湾への奇襲攻撃を受けて、「リメンバー・パールハーバー」を合言葉として日本へのリベンジに燃えた米国は、情報将校のレイトンを重用することに。本作の導入部では、新たに太平洋艦隊司令長官に任命されたチェスター・ニミッツ大将（ウディ・ハレルソン）から、「山本大将の考えを読み、彼の次の動きを教えろ」と命じられたレイトンが、さまざまな情報を分析した結果、珊瑚礁での攻防戦に続く次の日本軍の目的地はミッドウェイだと確信するに至る経過が相当な説得力をもって描かれている。それを見ていると、“情報戦”では当時の米日の努力と力量の差が明らかだ。

他方、日本海軍が戦艦、空母、航空機の全力を挙げてミッドウェイ島の攻略に向かったのは、1942年4月18日の東京空襲が大きな要因になっている。アメリカ空軍の爆撃機の飛行距離を考えれば、東京空襲はあり得ない。そう考えていた山本にとって、東京空襲は大ショックだったから、「天皇陛下に申し訳ない」と苦悶するシーンは説得力がある。東京空襲に向かったのは、日本の東方650マイル（約1046km）の太平洋上まで進入した空母ホーネットから飛び立った陸軍の敏腕パイロットであるジミー・ドゥーリトル中佐（アーロン・エカート）率いるB25爆撃機16機だが、東京をはじめ、川崎・横浜・横須賀・名古屋・四日市・和歌山・神戸・新潟などの各都市を縦断爆撃した後、燃料切れ覚悟で中国に向かった彼らを待ち受けていた運命とは？もちろん、当時の中国は日本に侵略されている国であると同時に、連合国側だ。このストーリーは『パール・ハーバー』でも詳しく描かれていたので、本作のそれと対比してみるのも一興だ。

しかして、当時世界最強の日本海軍が総力を挙げて作戦化した「MI作戦」とは？

## ■大スペクタクルに注目！魚雷は？急降下爆撃は？■

2020年4月10日に亡くなった大林宣彦監督は“映像の魔術師”と呼ばれていたが、『インデペンデンス・デイ』に代表されるローランド監督のSF Xを多用した映像表現も定評がある。本作は“情報戦”の面白さと、大スペクタクルの面白さの両方を追及している上、世界ではじめて空母とその艦載機によって大規模に展開されたミッドウェイ海戦がネタになっているから、スクリーン上で展開される魚雷の威力と急降下爆撃の威力に注目したい。『永遠の0』（13年）では、ラストに至って、あくまで冷静沈着に魚雷発射のタイミングを狙う主人公の姿に感動させられた（『シネマ 31』132頁）が、本作では何度も登場してくる急降下爆撃の威力に注目！

キネマ旬報9月下旬号は44ページから53ページにわたって本作を特集しているが、その中に生田英孝の「一粒で二度おいしい空戦活劇!？」がある。そこでは、皮肉な表現を多用しながら、「重厚な実録戦史というより、『猪突猛進(ホットショット)』型軍人の白人ヒーローが大暴れする、気のおけない昔ふうの空戦スペクタクルそのものなのである。」と書かれているので、それも参考にしながら、急降下爆撃の威力を堪能したい。

## ■□■山本五十六、南雲忠一、山口多聞の描き方は?■□■

日本人は「幕末モノ」、「明治維新モノ」では、坂本龍馬が一番好き。そして、「太平洋戦争モノ」では山本五十六が一番好き。相場はそう決まっている。したがって、過去、山本五十六を演じたのは、三船敏郎、山村聡、役所広司等のそうそうたる俳優だが、それに比べると、本作で山本五十六を演じた豊川悦司は?アメリカ側は、真珠湾攻撃を受けた後、異例の形で少将から大将に昇進して太平洋艦隊司令長官となったチェスター・ニミッツ大将が、一貫して理想的なリーダー像として描かれている(?)ので、それに比べると、日本側の山本五十六は少し分が悪い・・・?

真珠湾の奇襲攻撃大勝利の報告を受けた山本が、石油施設を攻撃しなかった南雲忠一(國村隼)についてボロカスに言うシーンは如何なものと思うが、ミッドウェイ作戦でも、南雲の指揮の迷走ぶりは顕著に描かれている。それに対して、一艦だけ生き残った「飛龍」の艦長で、第二航空戦隊司令官たる山口多聞(浅野忠信)が孤軍奮闘する姿は日本的には有名だが、本作でもそれは顕著だから、それに注目!もともと、敵の手に渡さないため、自軍の駆逐艦の魚雷で沈められる運命に置かれた「飛龍」と運命を共にするという日本的発想はドイツ人には理解できないと思うのだが、エメリッヒ監督はその点をどのように解釈したのだろうか?

それを含めて、MI作戦を全体にわたって後方から指揮した山本長官と現場の責任者だった南雲中将、そして、「飛龍」の艦長として奮闘しながら艦と運命を共にした山口少将の三者三様の描き方を、しっかり確認したい。

## ■□■新聞紙評の評価は?キネ旬の評価は?■□■

本作はエメリッヒ監督の戦争大作だけに、新聞紙評は多い。そして、その評価は概ね良好だ。また、10ページにわたって本作を特集したキネマ旬報9月下旬号でも、少しひねった書き方ながら、当然褒めている。しかし、その「REVIEW 日本映画&外国映画」で、宇野維正氏はなんと星1つ。しかも、「技術的に一定の水準に満たない作品以外に★一つはつけないようにしているが、本作の★一つはその企画の謎としか思えない鈍感さに対して。」とボロクソに書いているので、それに注目!「企画の謎」とは、『ダンケルク』や『1917』の時代(本作のアメリカ公開は19年)に、ハリウッド大作のバジェット規模で、CGでの空中戦(それ自体はよく出来ているが)や戦勝国の軍人とその家族のベタなメロドラマを描いた戦争映画の企画がスルスルと通ったこと」だが、いくら何でもこの評価は厳しすぎるのでは・・・? 2020(令和2)年9月23日記